

《資料紹介》ヴァレリーとジャムのジッド宛未刊書簡

吉井, 亮雄
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7162039>

出版情報 : Stella. 42, pp.77-82, 2023-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu
バージョン :
権利関係 :



《資料紹介》

ヴァレリーとジャムのジッド宛未刊書簡

吉 井 亮 雄

小稿では、ポール・ヴァレリーとフランシス・ジャムがジッドに宛てた未刊書簡2通を紹介・提示したい。いずれ関連の研究誌等で報告されるであろうが、それに先立ち、ここでは若干の補説とともに日本語訳を示し、稿末にフランス語原文を掲げる。

まずはヴァレリー書簡から——。これは2021年10月、サザビーズ・パリで競売に付されたもので、パリ16区の自宅から、当時ニース滞在中のジッドに宛てて送られた1942年2月15日付の地域間共通ハガキ（消印は翌16日）。表面には宛先として「アンドレ・ジッド様 / ホテル・アドリアティック / ニース / アルプ＝マリティーム県」、差出人として「ポール・ヴァレリー / ヴィルジュスト通り40番地 / パリ」と記され、裏全面を青色インク・ペン書きの文字列が埋める。2009年に増補新版が出た『ジッド＝ヴァレリー往復書簡集』の配列では《633 bis》と打たれるべき詩人最晩年の書簡記述である¹⁾ ——

《ヴァレリーのジッド宛》

[パリ, 19] 42年2月15日〔日曜〕

親愛なるアンドレ、よいアドバイスをありがとう。だが、幸いなことに今年は手の症状は和らいでいます……。

……〔レオン＝ポール・〕ファルグからの長電話で中断させられたが、君への手紙にもどらう……。ロジェ・マルタン・デュ・ガールからコーヒーの代替品を勧める実に親切なアドバイスをもらって驚いた。メモしておいたが、ありがたいことに今のところ手元には焙煎できる豆がまだいくらか残っているんだ！——そして〔その一方では〕……嗚呼、今まで僕はこんなにタバコを吸ったことはなかった！さらにもうひとつ、とても大きな気懸かりがある。コレージュ〔ド・フランス〕でのキャリアがもうじき終わりそうなんだ。生活費の高騰（これは最悪なところまで行くだらう）、そして俸給の停止となれば、ひどく心配だ。

君が『フィガロ』に寄稿していることは知っているが、ここ〔占領地区のパリ〕では『フィガロ』は出ていない。おそらく僕も新聞の仕事をせざるをえなくなるだろう……。

だが、どの新聞なのだろう？ それに僕は記事の書き方なんて、小説の書き方にもまして知らないし……。[そういうわけで] 弁護士登録をしたい！ 分かるかい？ 僕の5番目の職だ！

親愛なるアンドレ、心より君の

P. V. [ポール・ヴァレリー]

ジッドからの2月5日付地域間共通ハガキへの返書であるが、文通者は次のような旨をヴァレリーに書き送っていた——「手の痺れをとるために熱い湯に浸かるのは賛成できない。必要なのは熱い砂風呂で、あらゆる点でそれが望ましい。「オルテドリン」は僕も時々使っている。「ベンゼドリン」も勧められたが、まだ試してはいない。またもや耐えがなくなった痒みを鎮めるために自己免疫療法を受けたが、その結果、不眠症になってしまった。とはいえ、仕事はかなりしている。『フィガロ』に毎週寄稿しているんだ。当地ではシモン・ビュッシー夫妻とロジェ・マルタン・デュ・ガールにしか会うことがない。ロジェは君の素晴らしいハガキを見せてくれた」²⁾、云々。オルテドリン、ベンゼドリンはいずれもアンフェタミン硫酸塩系の神経刺激剤。ジッドからの「よいアドバイス」とは、砂風呂や薬剤など、手の痺れに効果的な療法のことだったのである³⁾。

続いて吐露されるコレージュ・ド・フランス教授職にかんする詩人の不安は結果的には杞憂に終わる。その経緯については、ミシェル・ジャルティによる浩瀚な評伝から次の一節を引いておこう——「[1941年]の秋、ヴァレリーは停年に達し、コレージュ・ド・フランスでの最終講義で退任の辞のようなものを述べたとはいえ、そこでの教育を続ける希望を捨ててはいなかった。[翌年]3月には少数ながら聴講生たちが集まってペタン元帥にヴァレリーの講義の延長を求める手紙を書き、4月には、[精神科医の夫ルイと共に多くの医学・文学関係者を迎えたサロンの主宰者]ヴェラ・プールが同様の嘆願書をペタン元帥に送っていた。[…]この講義の延長は完全に合法的なものとなった。というのも、適用除外として、また戦闘が続くかぎり、公務員の停年超過を認めるという法案に、3月13日ペタンが調印したからである」⁴⁾。

最終段落の『フィガロ』にかんする記述についても一言——。1940年6月のナチス・ドイツによるフランス占領を機に、同紙や『ル・タン』など主要メディアのいくつかは、本拠をパリからリヨンへと移したため、首都をはじめ占領地域ではこれらの講読は事実上不可能となっていた⁵⁾。またジッドの『フィガロ』

への寄稿は1941年11月から翌年6月まで計18回に及び、それら一連の文章は1943年、『架空会見記』の総題のもとに単行出版される⁶⁾。

さて、もうひとつの未刊資料は2023年3月インターネット市場に現れたジャムの短筒(とそれを収めた封筒)。小型用箋1葉にこの詩人独特の太く大振りなペン書き文字で10行ほどが書き付けられ、生地ピレネー＝アトランティック県オルテーズから、ジッドの母方の居城があったカルバドス県ラ・ロック＝ベニヤールに向けて発信されている。2014年から翌年にかけて公刊された『ジッド＝ジャム往復書簡集』増補新版(2巻本)では《3 bis》として配されるべき最初期の書簡である⁷⁾。記述量からしても補説はさほど必要あるまい――

《ジャムのジッド宛》

[オルテーズ], 1894年8月1日[水曜]

拝略

神経がひどく高ぶっており、長い手紙を差し上げることが適いません。オランドルフ社からお手元に拙著『詩集』^{ヴェール}を一冊送付させます。大いなる共感の証としてご笑納ください。[そして]そこに本状と、私が作った次の未発表の2行詩をお添えください。

*La terre, le ciel et la mer :
aimer, aimer, aimer, aimer.*

私の賛嘆の念をお信じいただきたく

フランシス・ジャム

ジッドとジャムはこの前年、共通の友人ウージェヌ・ルアールを介して知り合っていたが、当然ながら書簡の文面には後の親密でくだけた調子はまだ現れていない。版元を通じてジッドに贈られた刊出まもない『詩集』はジャムの4番目の版本で(前3作は非売品ないし極小部数の出版)、90頁ほどの紙面に15の韻文詩篇が並ぶ。両者はその後も互いに著作を贈り合うが、1905年にジャムがカトリックに回心してから関係は次第に疎遠になってゆき、1925年にはジッドが過去の精算の意味をも込めて、当該『詩集』をはじめ、詩人からの献本全34点を競売に付すまでになる(クロードルやウージェヌ・モンフォールらについても同様の対応)⁸⁾。ちなみに書簡に引かれた2行詩は、2006年に増補版が出た網羅性の高い『ジャム全詩集成』⁹⁾のなかには見当たらない(その出来映えからすれば、転用・公表されずに終わったのも「^{ぐへ}宜なるかな」と言うべきか)。

以上、ごく簡略ながら未刊書簡2通を提示した。ジッドの送受信未発表分にかんしては、今後でもできるだけ機会を逃さず、その紹介に努めていきたい。

註

- 1) Voir André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance (1890-1942)*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF» / *Cahiers André Gide* 20, 2009, pp. 946-947.
- 2) Voir la lettre de Gide à Valéry, du 5 février 1942, *ibid.*, p. 946.
- 3) 『ジッド＝ヴァレリー往復書簡集』増補新版の校訂者は、1942年7月のロジェ・フロマン宛マルタン・デュ・ガール書簡を引いて、後者はヴァレリーに神経刺激剤オルテドリンを勧めていたと推測するが (voir *ibid.*, p. 946, note 2), これはおそらく誤り。ヴァレリー書簡に記されるように、当時品薄となっていたコーヒーの代替品のことが話題であったと思われる。
- 4) Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris : Fayard, 2008, p. 1128. 引用は次の日本語訳による (ただし訳註は本稿筆者) —— ミシェル・ジャルティ 『評伝 ポール・ヴァレリー』 (恒川邦夫・監訳), 水声社, 2023年, 第3巻 465-466頁。
- 5) リヨンに本拠を移した『フィガロ』の活動の若干については、拙著『ジッドとその時代』, 九州大学出版会, 2019年, 第5部・第4章「ジッドの『アンリ・ミショーを発見しよう』——1941年のニース講演中止をめぐる——」(525-553頁)を参照されたい。
- 6) 単行版としては次の3種が同じ1943年に刊出する —— André GIDE, *Interviews imaginaires*, Yverdon et Lausanne : Éditions du Haut-Pays, 1943; *ibid.*, Paris : Gallimard, s. d. [1943]; *ibid.* [avec *La Délivrance de Tunis*], New York : Jacques Schiffrin, s. d. [1943].
- 7) Voir André GIDE - Francis JAMMES, *Correspondance (1893-1938)*. Nouvelle édition établie et annotée par Pierre LACHASSE et Pierre MASSON, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF» / *Cahiers André Gide* 21-22, 2014-2015, t. I, pp. 60-61. ただし同書簡は、名宛人が明記されないかたちで (つまりジッド宛書簡とは示されずに), その記述の一部分が1925年4月に行われたジッド蔵書の競売目録に採録されていた (voir le *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*. Avec une préface de M. André Gide. Vente des lundi 27 et mardi 28 avril 1925 [Hôtel Drouot], Paris : Édouard Champion, 1925, p. 32, item n° 155)。
- 8) 前註7に挙げた競売目録の32-37頁を参照。この競売の具体的な模様や象徴的な意味合いについて、またジッドとジャムとの関係については、前掲拙著, 第4部・第3章「蔵書を売るジッド——1925年の競売——」(431-442頁), および第2部・第3章「〈状況に想をえた小品〉——『放蕩息子の帰宅』の生成, 作品の読解, 同時代の反響——」(210-262頁)を参照されたい。
- 9) Francis JAMMES, *Œuvre poétique complète*. Édition préparée et annotée, révisée et augmentée par Michel HAURIE, préface de Michel DÉCAUDIN, introduction par Pierre ESPIL, Biarritz : Atlantica, 2006.

PAUL VALÉRY À ANDRÉ GIDE

[*Paris, dimanche*] 15. 2. [19]42.

Mon cher André, merci du bon conseil mais, per fortuna, je souffre moins des mains, cette année...

...Interrompu par un long téléphone de [*Léon-Paul*] Fargue, je reviens... J'ai été étonné de recevoir un avis très aimable de R[oger] M[artin] du G[ard] me recommandant un succédané du café. J'ai pris note. Mais pour le moment, grâce aux dieux, j'ai quelques grains encore que l'on grille chez moi ! – Et... je n'ai jamais, hélas, tant fumé !... Autre hélas, des plus sérieux – je vois venir la fin de ma carrière au Collège [*de France*], et un avenir venir aussi dont je suis très très préoccupé. La vie hors de prix (et qui va aller à l'extrême) et le traitement aboli, c'est un terrible souci.

Je sais que tu collabores au *Figaro*, mais le *Figaro* ne se montre pas par ici. Je serai peut-être forcé de donner, moi aussi, dans le journalisme... Mais lequel ? Et puis, je ne sais pas plus faire un article de journal qu'un roman... J'ai envie de me faire inscrire comme Avocat ! Tu vois cela ? Mon cinquième métier !

À toi, mon cher André, de cœur.

P[aul] V[aléry]

[*Destinataire :*] Mr André Gide / Hôtel Adriatic / Nice / A[lpes-]M[aritimes]
[*Expéditeur :*] Paul Valéry / 40, Rue de Villejust [*aujourd'hui rue Paul Valéry*] / Paris
c. p. Rue Singer, Paris XVI, 16-II-1942

*

FRANCIS JAMMES À ANDRÉ GIDE

[*Orthez, mercredi*] 1^{er} août 1894.

Monsieur,

Je suis trop nerveux pour vous écrire longuement. Je vous fais envoyer par Ollendorf [*sic*, pour Ollendorff] un exemplaire de mes *Vers*. Acceptez-les comme l'assurance d'une grande sympathie. Joignez à eux cette lettre et ce distique inédit qui est de moi :

La terre, le ciel et la mer :
aimer, aimer, aimer, aimer.

Et croyez à mon admiration.

Francis Jammes.

[*Destinataire :*] Monsieur André Gide / Château de la Roque / par Cambremer / Calvados
c. p. Orthez, Basses-Pyrénées, 1-VIII-1894

15. 2. 62

Mon cher André, merci du bon conseil
mais, par fortune, je souffre moins
des maux, cette année..

..Interrompu par un long téléphone
de Fargue, je reviens.. J'ai été étourdi
de recevoir un avis très aimable de R. M. du
G. me recommandant un succédané des
cafés. J'ai pris note. Mais pour le moment,
grâce aux diées, j'ai quelques grains
encore que l'on grille chez moi! - H.. je
n'ai jamais, he! las, tant-fumé!.. Autre
hélas, des plus sérieux - je vois venir le
fin de ma carrière au Collège, et un avenir
Yenise aussi dont je suis très très pré-occupé.
La vie hors de prix / et qui pousse à l'extrême,
et le traitement abolé - c'est un terrible
souci.

Je sais que tu collabores au Figaro, mais
le Figaro ne se montre pas par ici. Je
serais peut-être forcé de donner moi-même,
dans le journalisme - mais lequel? Et puis,
je ne sais pas plus faire un article de
journal qu'un roman.. J'ai envie de
me faire inscrire comme Avocat! Tu
vois cela? Mon cinquiesme métier!

A toi, mon cher André - le cam

P. V.